

【豊能地区】

日時：8月20日(14:00~16:00)

会場：豊中市立泉丘小学校

内容：講義・実技

「ミュージアムと教材、アボリジナルアートとトーテムポールのワークショップから」

講師：安見一葉先生（国立民族学博物館 技術補佐員）

<準備物> 絵の具、ストロー、割り箸、爪楊枝、スクリューブラシなど（ワーク1）

クレパス、色鉛筆、はさみ、接着剤、クラフト紙、角ダンボール（ワーク2）

・昨年度に引き続き、国立民族学博物館技術補佐員・安見一葉先生を講師に、「ミュージアムと教材、アボリジニアートとトーテムポールのワークショップから」を題に、実技研修を実施した。

初めに国立民族学博物館（以下、民博）の紹介をされた。お話の中で、民博に展示してあるものの中には、昨年度の研修で紹介いただいたメキシコの「モラ」、インドの「ミラー刺繡」など、今回の題材以外のものでもワークショップが可能であること、民博主催のワークショップ企画など、今後の図工の授業にヒントになりそうなことを紹介いただいた。

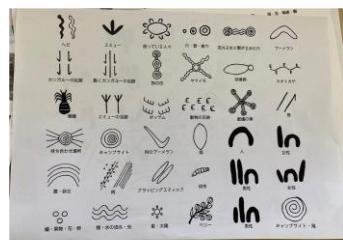


《実技研修》

1. アボリジナルアート

・アボリジナルアートと聞くと「点描」をイメージするが、点で埋め尽くす表現と考えてしまうが、本来は言葉を持たないアボリジニが、直線と曲線を組み合わせたり、面に点を乗せたりすることで、シンボルを描き、情報の記録や伝達のために使った絵画表現であり、それはアボリジニの人々、独自の世界観「ドリーミング」（自分の祖先は何者であったか、先祖から受け継がれた記憶、自分たちの家族はどうやってできたかなど）を表現するために生まれたものであるとお話をいただいた。

実技は、現地の人の描きかたにできるだけ近づけるために、机椅子ではなく床で描くようにし、筆を使わず描く、絵の具を水で溶かない（できるだけ）、空白があってもよい、完成したら裏にタイトルを書くという約束で行った。紙のコースターにシンボルを組み合わせながら、「お話」を描いた。小さいものに描くことから何度も挑戦できること、出来上がりに近づくにつれ、「周りの人は何のお話を描かれていたのか」気になり、自然と相互鑑賞が生まれる学習形態であった。



アボリジナルアートのシンボル

2, トーテムポール

・民博の中にも外にも展示しているトーテムポールは、もともとアメリカ北西海岸インディアンだけが作る彫刻の柱である。先祖から伝わる神話や伝説、婚姻などその家の歴史など、その家、一族との関係が深い動物や神話に登場する人物などを象徴的に表現した部族の家紋にあたるようなものである。一番上には家族のはじまりに関わるもの、その下にはつながりのある動物や人物、その下には母方の家紋…というように描かれている。沖縄のシーサーなどのような守り神という崇拝対象ではなく、自分たちの部族の住所を示す表札のようなものがもともとの性格である。他にも何かを記念して作られた記念柱や死を弔うための墓標柱なども存在する。トーテムポールは一本の木から掘り出すものであること、色にも意味を持つこと（赤は生命など）、色の組み合わせのルールなど定められていることなどをお話いただいた。



トーテムポールのシンボル

今回のワークでは、一番上は空を飛ぶもの（翼のあるものは翼を広げてはる）、その下は 地に関係するものの、一番下は水に関係するもののシンボルを描いた。シンボルは自分に関係するもので、オリジナルのものを描いた。（クレパス、色鉛筆、ペンなにを使っても良いとした。）四角柱型のダンボール箱に貼り付けて完成とした。筒形のものが一番ではあるが、今回は入手が容易な四角柱型のダンボール箱で行った。

ふりかえり

・アボリジナルアートとトーテムポールの両研修とも、「あとで説明をする」ような活動ができた。そのことは相互鑑賞を活発にし、対話的な学びが自然と生まれるものである。その民族が「何を大切にしてきたのか、何を受け継いでほしいのか、どんな想いや願いが込められているのか」などを学ぶことで、大切に受け継いできたもの、大事にしてきたことを念頭に話していただいたことが、「技法を学ぶ」だけではなく、より深く見て、考えて、表現できたのではないかと考えた。

※研修の中で紹介いただいた鑑賞の手助けになる民博の「アクティビティカード」は民博の HP から DL できます。